

わっしょい



静岡県

NO.36

ともに担い、ともに築く、りど ひと女と男の情報誌

特集 家族それぞれのかたち

「オムツを洗う手から得たもの」

作家・鈴木光司さんインタビュー



初恋を実らせ結婚。妻は高校教師、僕は作家修行中。
やらざるを得なくて始まった子育ては、おおざっぱでした。
でも、娘たちと過ごした濃密な時間が、いまでは深い絆になっています。



Interview

オムツを洗う手から得たもの

作家 鈴木 光司さん

『リング』『らせん』『ループ』—— ベストセラー作家はどんな素顔を持つのでしょうか。高校教師だった妻の元子さんと作家修行をしていた光司さんが選んだ方法は「主夫」でした。当時をふりかえり「新しい歌をうたおう」とあざれあでの講演で語りかける光司さん。その価値観と目標に向かう強さはどこから来るのでしょうか。講演を前に話をうかがいました。

病弱な父が反面教師に、
豪快な母は強く生きることを
教えてくれた

浜松市で過ごした少年時代、バンドに明け暮れた思春期、目的を持って勉強した浪人時代と大学生生活。転機となった結婚や育児、作家修行に、デビュー。そして現在と、人生のどこを振り返っても、いつも幸せで楽しい毎日でしたね。それは、他人の価値観にとらわれずに自由に生きるスタンスで歩んできたからだと思います。だから就職をしないで「主夫」をしたこともごく自然な流れだったんです。

「男たるものこうあるべき」という観念が、家事や育児に関わる男性はどうも軟弱だというイメージをつくってしまうでしょう。でも僕は結婚をし、子どもの父親になり育児をすることによって、男の本当の強さを実感しました。

それは昔の家長制度に見られるような、威張っているだけの父親像ではありません。思いやりや優しさを備え、大切な家族のためにいざというとき頼りになる存在を指します。

僕の父は病弱だったので、働いて家計を支えながら、家事も育児

家族

もやっていたのは母でした。それは子どもから見ても、とても理不尽に思えました。

一方、「どんなことでも一発勝負」というのが口癖の母からは、一度きりしか生きられない人生だから安全でつまらない生き方をするなど教えられました。小学生のときにバイクに乗りたいたいという、たしなめるどころか、夜中に学校の校庭に連れて行き、好きなだけ乗らせてくれました。

豪快な母から受けた影響は大きく、もし母が危ないことを止めるような人だったら、人生をかけて作家になるという発想にも至らなかったかもしれません。

女性の選択肢は

多ければ多いほうがいい

子どもをぎゅつと抱きしめたり、手をつないで愛情を表現することに対して、日本の父親たちには照れのようなものがありますよね。でも家族だからこそ、ちゃんとしたスキンシップが大切なんです。

「黙っていても目を見つめれば、お互いの気持ちがわかる」なんていうけど、そんなことはないですよ。僕は夫婦仲の秘訣を尋ねられると、決まって「それは、どんなときもコミュニケーションを大切にすること」と答えています。それから寄り添い助け合いながらも自立し、お互いに認め合うパートナーシップは大事だと思います。

僕と彼女はもともと幼なじみで、価値観も近く共通項がたくさんありますね。

いまは教師から出版社へ仕事を替え、新たなフィールドで頑張っている彼女に、精一杯エールを送っていますよ。最近ではだいぶ増えてきたけれど、昔は結婚、出産、働き方などについて限られていた女性の選択肢が、未来に向けてもつとつと増えるといいですね。

子育てはおおざっぱに

「子育てをした」といっても、すみずみまで完璧にというのはなく、かなり雑なものでした。

主夫時代は忙しく、他にも仕事はあるし、自分の時間も欲しい。手抜きができるところは手を抜いて無駄を徹底的に省き、おおざっぱな子育てに徹していました。雑といっても、子どもを乱暴に扱ったというわけではなく、たとえば、保育園から汚れ物として返ってきた着替えが、特に汚れていなければたたみ直してこっそりもとに戻したりしました。他人から見たら「いいかげん」といわれるかもしれないようなおおざっぱさで、家事も育児もこなしていましたね。けれど、その「いいかげんさ」が、子どもにはちょうどよかったのかな。中学二年と小学四年になる娘たちは、ちよつとやそつとではびくともしないほど健康で、たくましいおらかな性格に育っています。

す。空手部に入っている長女は、クラスでは自然に人との調和を図ることができ、社会性を備えた人気者なんですよ。

人は明るい未来に向かって歩く

「昔の時代がよかった」なんて言葉は好きではありません。過去があまりよい時代ではなかったからこそ、よりよい社会を築くために人は歩いていくものではないでしょうか。

根拠はなくても明るい未来を信じることはできます。目の前に困難なことがあっても、突破口があることを信じて突き進むような生き方や、他人の目を気にすることなく新しい価値観で自由に生きることにすばらしさを、社会に訴えていきたいです。

*

人々は、近い将来「家族」はこうあるべきといった固定観念から解放され、個々が暮らしやすい生活のスタイルを手に入れていくでしょう。その流れはゆっくりとありますが、確実に移行しつつあります。鈴木光司さんは多様性を認め合えるような明るい未来をめざし、若者たちへ勇気を与えるために、力強くたくましい小説をこれからも書きつづけていくことでしょう。

「文壇最強の子育てパパ」の活躍は、今後も期待されます。

子育てについてのエッセイ集



『新しい歌をうたえ』 1997年 新潮社 1,400円
『ママとパパに聞かせたい27の話』 1999年 海拓舎 1,200円

●すずき・こうじ 1957年浜松市生まれ。高校卒業後から作家になることを決め、慶応大仏文科へ。89年『リング』でデビュー。90年に『楽園』で日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。続編『らせん』では吉川英治文学新人賞受賞。『ループ』は98年のベストセラー第1位に。映画化、ドラマ化でも話題を呼んだ。自称「文壇最強の子育てパパ」として子育て経験を語るエッセイで注目を集める。98年中央教育審議会専門員。99年から「少子化への対応を推進する国民会議」のメンバー。小学校の同級生だった妻の元子さん、春から中学2年の美里さん、小学4年の千花さんと東京で4人暮らし。

家族 それぞれのかたち

「家族」——この言葉から何を思い浮かべますか。
父親を中心とした家父長制により生活を共にするまとまりが、
かつての「家族」でした。
女性の社会進出、経済環境の変化、自由と個性の尊重などに伴い、
家族のかたちがさまざまに変化しています。



10年前に自宅兼乳児保育園として発足したあゆみ保育園は、元気な声でいっぱい
木久子さん(左)と太田嶋弘子さん(右)の二人は「家族で同志です」と笑う

若い世代では子どものいる家庭が減り、夫婦二人暮らしや、未婚者が増え、
一方で、老人のひとり暮らしや老夫婦だけの家庭の増加など、高齢者の生活にも急激な変化が見られます。
この変化はさらに多様化しています。血縁や婚姻によらない結びつきの家族や、
一人ひとりを評価し、尊重するために契約を結ぶ家族もあります。
また、「男だから」という意識にとらわれず、子育てを楽しむ父親がいます。

『ねっとわあく』では、このような三つの家族を紹介します。
30年にわたり、同じ夢を追い続けている女性二人の家族を訪ねました。
職業選択の一つとして農業を選び、夫婦を核としてゆるやかに結びついている大家族と出会いました。
そして、子育てを中心に、連携プレーでお互いを支え合う共働きの夫婦が語ってくれました。

個人の自由と責任のもとにそれぞれが形づくっていく「家族」を、
人々がお互いに認め合い、受け容れていくことが、いま求められています。

一歩一歩あゆむように

「無心に仕事をしてきて、気がついたらあつという間に三十年です」「二人だからここまでこられました」というのが振り返ってみての感想でした。

仕事も生活も共にする二人の関係は、「特殊な家族みたいなものね」「友だちというより同志かな」との言葉のとおり、保育園の運営や家庭生活は助け合い、同じ目的を持ちながらも互いの自由な時間を大切にしてきたことが、共同生活を続けられた理由でした。

あゆみ保育園の歴史は、昭和四六年に二人が共同出資して、八畳と六畳間続きの家を建て、四人の乳児を預かりスタートしました。運営費と生活費を支えるために、九歳年上で収入の多かった鈴木久子さんが他の保育園での勤務を続け、同僚だった太田嶋弘子さんが先に退職してあゆみ保育園に専念しました。勤務を終えた鈴木さんが買い物、太田嶋さんが食事の支度をするというように、家事全般も二人で助け合ってきました。ときには夜半まで翌日の準備をしたために寝坊してしまい、登園した子どもに起こされたこともあったそうです。

「あゆみ保育園」は名前のとおり一歩一歩あゆむように、次々と生まれる課題を地域や友人の協力により解決し、昭和五年に法人認可を受けて、昭和五四年には乳児から五歳児まで保育するあゆみ第二保育園を開園しました。

取材1 仕事の合間に生活がある 血縁を超えて共同生活

私たちは「同志」の関係

閑静な住宅街にある保育園から子どもたちのにぎやかな声が響き渡ります。

血縁ではない女性たちが家を立てて開いた乳児保育園は、地域のニーズに合わせて発展。

働く女性を支えてきた保育園の歩みと、「家族」としての30年間の共同生活について聞きました。

園長 鈴木 久子さん 副園長 太田嶋 弘子さん

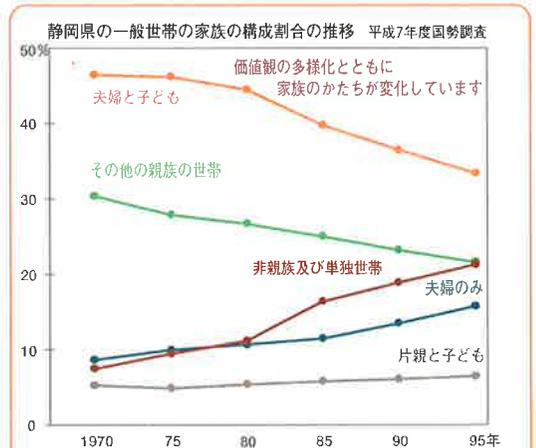
(静岡市 社会福祉法人あゆみ福祉会あゆみ保育園)

働く女性を応援したい

女性二人の保育園創設までには、どのようなことがあったのでしょうか。

十八歳で母親を亡くした太田嶋さんは、父親の希望に従い高校卒業後は中学一年と小学一年の弟の面倒をみるために家事をしていました。しかし、「これからは女性が資格を持ち自立することが大切だ」と、二十歳から専門学校に通い保育資格を取得しました。一方、鈴木さんは保母として一人で生活しながら働いていました。そんな二人が同僚として出会い、乳児保育の研究会に通う中で、お互いに同じ夢を持っていることを知りました。当時増え始めていた働く女性たちに対し、乳児保育の定員には限りがありました。仕事を持ち自立する気持ちの強かった二人は意気投合し、働きながら子育てをする女性を応援したいという夢を実現するために、一歩を踏み出したのです。

「二人でやってきたことを引き継いでもらうために」と、現在は太田嶋さんの末弟夫妻が経営に参画。「これからはお互いの健康を気遣いながら助け合って、楽しくやっていくのでしょね」という太田嶋さんの言葉に、「死ぬまで現役ですよ。身体が動かなくなっても、小さな子どもたちのためにできることはあります」と、七十四歳の鈴木さんは現役宣言をしていました。



多くの人に支えられて

血縁でない女性たちが家族となつて築いてきたあゆみ保育園は子ども好きな職員たちにも恵まれ、二人のアイデアをもとに保育園近くの公園に出張して、親子で遊ぶ会「仲良し広場」を毎月開催しています。また、将来は近隣の母親と子どもたちが憩えるような場所をつくり、楽しく育児ができる手伝いをしたいと、二人の夢はさらに広がっていきます。

